

水害から地域を守り 潮から耕地を守る

か け ど 掛戸の潮止水門



島根県^{おおだく}大田市久手町・^{はね}波根町の国道9号とJR山陰本線の間に、見るからに干拓地の様相を見せている水田が広がっています。元は波根湖と呼ばれ、湾の入口に砂州が発達することで、湾の奥が隔てられてできた潟湖^{せきこ}でした。

潟湖は、砂州が湾の入口を塞ぎながらも嵐や津波時には流され、形を変えながら形成されます。この間、砂州には自然の水路が形成されますが、水路は同じ場所に安定的に存在することもあれば、嵐などで頻繁に位置を変えることもあり、そのうえ海水が進入してくる入り口でもありました。

干拓以前の波根湖も淡水と海水の行き来があり、水路が閉ざされ気味になると大雨で湖は増水し、水害をもたらすことがありました。このため、地域の有力者であった有馬氏が排水のために要害山と梶山の間を幅50mにわたって開削し、徳治元年(1306)に完成したのが掛戸の切り割りであると伝えられています。この開削により柳瀬の水路は閉ざされ、湖水は掛戸から排水されるようになりました。結果、波根湖岸の水田化を可能とし、特に江戸中期以降、石見銀山領の代官川崎平右衛門が波根湖の新田開発と掛戸水路の改修を実施し、明治以降も引き継がれました。

しかし、干ばつ時には湖水面の低下で海水が逆流し、塩害や高潮の被害を受けていたため、この対策として大正7年(1918)、波根西村によって水門が建設されました。一部取り壊されましたが、この石造りの樋門が、「眼鏡型潮止水門」と呼ばれているものです。

現在、残っているのは長さ35m程で、堰堤の東端からL字状に約6m、海に向かって延びています。このことから東側では堰堤と陸地との間に5~6mの導水路がつくられていたのでしょう。また堰堤は高さ2m、幅は底部2.5m、上部1mで、壁面は海側が垂直で湖側は傾斜面となっています。眼鏡状の水門は現在12門ですが、元は13門あったと思われます。ところが、この堰堤は高波の時には波浪が乗り越えて潮止の役目を十分果たさないため、大正14年に木造の潮止が水門の外側に作られ、干拓地を塩害から守りました。

幾世紀にもわたって多くの人々が取り組んできた掛戸の潮止は、波根湖の全面干拓によってその使命を終え、今では締め切り堤防と排水機場が地域を水害から守っています。

■位置図



田畑に様変わりした旧波根湖「久手干拓地」と波根湖干拓二十周年記念碑



海側から見る掛戸の潮止水門



掛戸排水機場と水門
排水機場には常時排水用ポンプ1台、洪水時排水用ポンプ2台が整備されている



湖側から見る掛戸の潮止水門